

24. 興味ある所見を示した子宮頸癌症例について (carcinomatous papilloma について)

(大阪府立成人病センター)

横山 泰, 高橋 義浩, 西本 政長
本郷 二郎

(病理) 和田 昭

子宮腔部のsquamous cell papillomaの報告は少く、特に malignancy を示したものは、1964年 Pitkin らの報告によると諸報告を通覧しても15例に過ぎないと云う。

この報告では、本症の自験症例5例とその臨床所見・細胞診、コルポ診、組織学的所見を報告した。その内訳は、Kazal & Longの分類によれば、

carcinomatous papilloma……2例

basal cell hyperplasia を伴う solitary papilloma .
……2例

solitary papilloma……1例である。

carcinomatous papillomaの2例は、ともにsquamous cell carcinoma in situ 様で、その1例では micro-invasion 像が見られ、また上皮内の側方浸襲部に喫歯状の浸潤像が見られた。

諸報告から、carcinomatous papilloma の組織異型性がときに mild で benign と誤り易いこと、高年者・非妊例では特に注意を要することなどを述べ、condylo-matous p. との間に本質的な組織所見上の差のないことなどに言及した。

第7群 子宮癌の早期発見

25. 腔鏡診を中心とする子宮頸癌早期診断

(札幌医大)

橋本 正淑, 小森 昭人, 森 和郷
平沢 峻, 横山 幸生, 川瀬 哲彦

頸癌早期診断法として、過去4年来、腔鏡診、細胞診、組織診の三者併用により正確な診断を期しているが、5,500例の観察成績並びに腔鏡診による異常所見の follow up 成績につき報告する。① 性器出血が49.3%の第一位の自覚症状で、その66.7%は異常所見である。又無症状で来院せる者のうち7.9%は異常所見であった。② 当教室に於る腔鏡診所見分類と発生頻度を述べるが、5500例中17%の異常所見が発見された。③ 血管像のうち、異型血管の多くは侵入癌に見られ、異常所見の判別に役立つ。④ 腔鏡診により、所謂癌母地が見られた場合、照準組織診を要するが、又変換帯は上皮再生並びに退行の場であり、注意すべきである。⑤ 肉眼的に非癌とした5098例中より69例の侵入癌が三者併用により発見された。⑥ 侵入癌356例につき細胞診と腔鏡診の関係を見た。⑦ 腔鏡診により異常所見95例の follow up 成績につき、興味ある症例を述べる。

26. 子宮癌集団検診成績

(広島大)

藤原 篤, 平田 政司, 白砂 圭一
最近9年間、27回に亘って行つた当教室の子宮癌集団

検診の総合成績は次の如くである。

(I) 一般的関連事項の調査成績

1) 受診者7706名の年齢別構成は35~39才が最も多く、ついで40~44才、45~49才の順であつた。

2) 初経年齢は平均15.3才、閉経年齢は平均47.4才、結婚年齢は平均21.4才であつた。

3) 妊娠率は95.2%, 分娩率は92.8%, 人工妊娠中絶率は38.1%, 自然流産率は23.4%。

4) 受診者の近親者における癌罹患者頻度は24.8%で、臓器別には胃癌が最も多く(12.6%), ついて子宮癌(9.1%)で、家系別には父母が最も多かつた(43.9%)。

5) 受診者中自覚症状が全くなくて受診したものが55.2%で半数以上を占めるに至つた。自覚症状の中では腰痛と帯下が多かつた。

(II) 検診成績

1) 臨床診断: 7706名中16名(0.2%)の子宮頸癌を発見し得た。

臨床診断では腔部ビランが最も多く(37.5%), 子宮後傾屈症が30.1%で、その他子宮筋腫が1%にみられた。

2) 細胞診: 細胞診のみを行つた6893名中陽性10名(0.2%), 疑陽性58名(0.8%)であつたが、再検査の受診率が悪く、集団検診の実施方法に検討すべき問題点があるが、陽性又は疑陽性例中には老人性腔炎が最も多